

ショートコメント vol.328 (2024年7月10日)

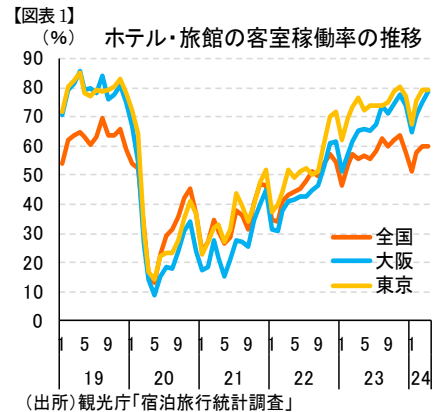
テーマ：京都、東京のホテルは訪日客の比率が50%超え
～持続困難な水準、市場環境の変化に要注意～

●ホテルの客室稼働率の上昇

ホテルの客室稼働率が順調に回復している。全国、東京、大阪ともに右肩上がりの推移が続いており、コロナ前の水準に戻ってきたといってもよい（図表1）。

業界では深刻な人手不足が続く中、依然として満室稼働が困難なホテルや旅館は少なくないものの、全体的には稼働率の上昇が続いている。

加えて、宿泊料金の上昇も続いており、足元はコロナ前の1.3倍を超える水準にある。結果として、売上ベースではコロナ前を大きく上回る状況となっている。こうした様々な追い風を背景に、今やホテル業界は、百貨店等と並んで数少ない好調業種の一つに挙げられる。

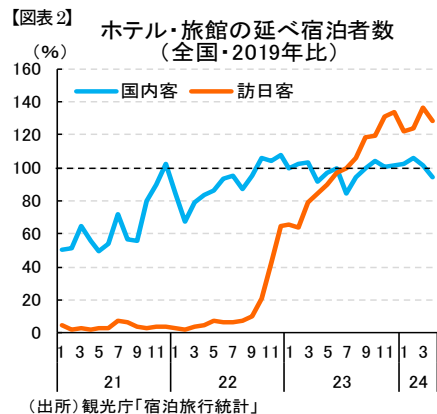


●インバウンドと国内客の二極化

ただ、好調にみえるホテル業界も、一概にそうとは言い切れない。インバウンドと国内客の二極化が進んでいるからである。現状はインバウンドの増加が続く一方、国内客の息切れが目立ち始めている。

図表2は、国内客とインバウンドについて、コロナ前比の推移をみたものであるが、はっきりと明暗が分かれている。国内客が失速している要因には、宿泊料金の上昇傾向に加え、実質賃金の減少による節約意識の拡大などが挙げられよう。

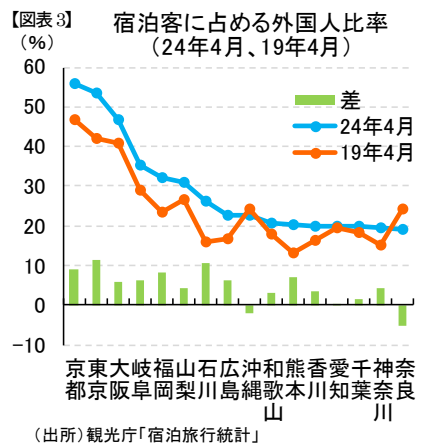
今やホテルの需要増加を支えているのはインバウンドであり、それを示すように、宿泊客に占めるインバウンドの比率が大きく上昇している。



●エリア別の状況とコロナ前との比較

宿泊客に占めるインバウンド比率については、直近の24年4月の実績で、京都が55.9%と全国で最も高い（図表3）。コロナ前の19年4月に比べると、9ポイント近い上昇となる。京都と同様に、東京も5割を超える水準にあるなど、この2都府は宿泊客の半数以上をインバウンドが占める。それに続いて、大阪も40.7%となっており、インバウンドが半数近い比率に上る。

コロナ前比で上昇が目立つのは、石川のほか、福岡や熊本といった九州勢であるが、熊本に関しては台湾 TSMC の半導体工場建設に伴う影響が大きいとみられる。



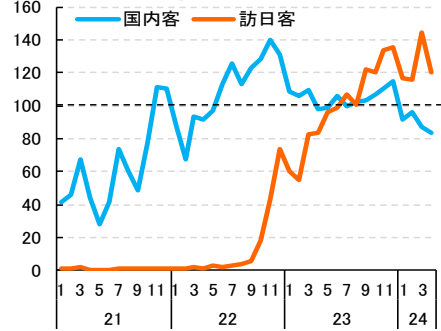
※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。

●今後の展望について

全国平均でも、直近は27.9%まで上がっており、コロナ前に比べると約6ポイントの上昇となる。直近の4月は花見シーズンで、特にインバウンドの増える時期であるため、外国人比率が高まりやすいことは否めない。ただ、たとえば京都の動きをみると、単純にインバウンドが増えているだけでなく、国内客の減少が顕著となっている(図表4)。

こうした状況で、仮にインバウンドが失速することになれば、ホテル需要全体が一気に冷え込むことが避けられない。今後、急速な円高の進行といった外部環境の変化が起きた場合、インバウンドの減少とともに、ホテル市場の需給が予想以上に悪化する可能性に注意が必要といえよう。

【図表4】 ホテル・旅館の延べ宿泊者数 (京都・2019年比)



(出所)観光庁「宿泊旅行統計」

本件照会先: 大阪本社 荒木秀之
TEL: 06-7668-8805 mail: hd-araki@rri.co.jp

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。